



0. 目次構成

序論	
第0章	本研究について
0.1	研究背景
0.2	研究目的
0.3	研究方法
0.4	既往研究
0.5	用語の定義
本論	
第1章	シェーカー教成立の背景 シェーカーによる伝記から
1.1	はじめに
1.1.1	対象とする資料
1.2	マンチェスター時代
1.2.1	鍛冶屋の娘
1.2.2	ウォルドレイ・ソサエティ
1.2.3	アン・リーからマザー・アンへ
1.3	アメリカへの入植
1.3.1	ニスキューナの土地
1.3.2	アメリカにおける宣教のはじまり
1.3.3	マザー・アンの死
1.4	小結
第2章	シェーカー教共同体の統治構造
2.1	はじめに
2.2	第二世代以降による発展
2.2.1	ジェームズ・ウィタカー
2.2.2	ジョセフ・ミーチャムとルーシー・ライト
2.3	シェーカー教の組織構造の変遷
2.3.1	1787年 初めての集結
2.3.2	1791年「ORDER OF FAMILIES」の結成
2.3.3	1793年「GOSPEL ORDER」の完成
2.3.4	1800年「GATHERING ORDER」の設立
2.4	小結
第3章	プレザント・ヒルにおける実践①〈19世紀前半 建築活動〉
3.1	はじめに
3.2	プレザント・ヒルのはじまり
3.2.1	西への拡大(1805)
3.2.2	エリーシャ・トーマスの土地
3.2.3	コミュニティ全体の位置関係
3.3	配置の変遷
3.3.1	A. 建造物の評価
3.3.2	B. 配置の変遷
3.4	小結
第4章	プレザント・ヒルにおける実践②〈19世紀後半 言説〉
4.1	はじめに
4.2	対象とする資料『THE MANIFESTO』(1871-1899)
4.2.1	基本情報
4.2.2	分析対象とする記事
4.3	内容分析
4.3.1	主なトピックの分類
4.3.2	内容の変遷
4.4	小結
第5章	考察:シェーカー教のミレニアリズム
5.1	はじめに
5.2	プレザント・ヒルの「衰退」に対する態度
5.3	シェーカー教理論における「アメリカ」
5.4	二面性を包含するシェーカー教の千年王国
5.5	小結

結論／謝辞／参考文献・図版出典

〈序論〉 本研究について

1. 研究背景

本研究は早稲田大学建築史中谷礼仁研究室The Believersゼミの研究に基づくものである。当ゼミは2017年度から活動を開始し、「シェーカー教の生活デザイン」をキーワードにシェーカー教に関する文献、史料の翻訳とそれに伴う関連調査を行うことによって、シェーカー教の実際の生活やコミュニティの運営方法を詳細に復元し、その成果を日本語で参照可能な数少ない資料のうちのひとつとして公開することを目的として活動を行ってきた。

本研究が対象とするシェーカー教は、イギリス人の教祖アン・リー(Anne Lee, 1736-1784)によって興され、アメリカにおいて18世紀末から200年以上にわたって活動しているキリスト教団体である。彼らはアメリカ東部を中心に20以上のコミュニティを形成し、共通した教義やルールのもと共同生活を行った。

シェーカー教は、日本では一般に簡素で近代的な家具デザインの先駆けとして知られているが、独身性を基本教義としていたことなど、極めて特殊な共同体としての特徴はあまり知られていない。当ゼミでは、シェーカー教の共同体がデザインした家具や道具、建築物を、宗教としての教義や共同体の規律によって規定された生活と切り離さず、生活のなかの労働や仕事、食事、礼拝などと一体のものとしてとらえ研究を行なうことを目標としており、本論文も同じ立場に立つものである。

2. 研究目的

本研究の目的は、シェーカー教の地上における実践と教義の相互関係を明らかにすることである。

シェーカー教の建造物を語る際に、常に引き合いに出されるのが「シェーカー教は自分たちの暮らす地上の空間を、地上に実現された天国であると考えていた」という点である。これをもってシェーカー教は一般的に「ポスト・ミレニアリズム(後千年王国主義)^[1]」と分類される。しかしシェーカー教は200年以上継続し、最大時には数千人の信者を抱えた宗教的共同体である。建造物などのデザインの背後にある信仰に対する意識も200年の中で変遷を続けたであろうことが推測できる。

したがって本研究ではシェーカー教における地上にある事柄を規制する構造や秩序に着目する。本研究は一つのコミュニティにおける建築活動の評価を行い、その実践がシェーカーの信仰に与えた影響を考察、ひいてはシェーカー教全体における実践と教義の相互関係を明らかにすることを目的とする。

3. 研究方法

第1、2章では基本的に時系列に沿って、シェーカー教設立の背景から統治構造の完成までを明らかにする。

次に、第3、4章では一つのコミュニティにおける活動を分析することで地上における実践が教義に影響を与えた瞬間を描いていく。ケンタッキー州につくられたプレザント・ヒルというコミュニティを対象とし、第3章では19世紀前半に活発に行われた建築活動を対象としシェーカー教の建造物に見られる信者の意識の変化を描いていく。そして第4章では19世紀後半の当コミュニティ住人によって行われた言論活動を分析することで教義・信仰の変化を検討する。

最後に第5章ではまず第3章・第4章の結果をシェーカー教全体で位置づけるを試みる。そして以上の考察と第5章をもとに、シェーカー教の地上にある事柄を規制する構造の変容について考察する。

4. 既往研究

本研究の研究領域を扱った既往研究を概覧し、大別すると2つの異なるアプローチを見いだせる。

第一のアプローチは日記史料などを用いて、建設時の事実関係を洗い出し、建築活動を通史として述べたものである。

Clay Lancaster『Pleasant Hill: Shaker Canaan in Kentucky, an architectural and social study』(Warwick Publications, 2001)

Lancasterによる研究はこのアプローチの最たるものであり、プレザント・ヒルの住人によって記録されていた日記史料やそのほかの手紙等の一次史料を網羅的に参照し、プレザント・ヒルにおける建築活動を通史的に述べた、非常に資料性の高い研究である。

Lancasterはケンタッキー州出身の建築史家として、ケンタッキーにおけるシェーカー建築の地理的な影響にも精通しており、この研究はプレザント・ヒルにおける建築の通史としては非常に完成されたものである。プレザント・ヒルの建築に関してここまで完成度の高い研究が可能であったのは、プレザント・ヒルにおける建築活動がシェーカー共同体の中でも特に活発であったことが要因である。このような経緯もあり、現在シェーカー・ヴィレッジの跡地に建物が一番多く残されているのもプレザント・ヒルである。したがってシェーカーの建築活動を扱う研究にとっては理想的な研究対象である。

第二のアプローチは、シェーカー教の建築をデザインの観点から、教義との関係で分析するものである。これは第一のアプローチの成果に基づいた研究である。

Doroles Hayden『Seven American Utopias. The Architecture of Communitarian Socialism, 1790-1975』(The MIT Press, 1979)

アメリカにおける7つのコミュニティを対象としユートピア論を展開した研究で、第4章でシェーカー教が取りあげられている。Haydenはシェーカー教のコミュニティ建設の手法を取りあげて、「なぜ彼らはモデル・シティを必要に応じて複製することに成功したのか」という問いに答えようとしている。そのなかでHaydenはまずシェーカーの理論を把握し、それに基づいて実際のコミュニティを分析している。Haydenのアプローチは非常に参考になり、本研究の出発点もここにある。しかしこの研究は理論を固定されたものとして扱っている点、そして言及されている実践に関しても様々なコミュニティの例を分類しないまま取りあげているという点でさらなる発展が可能なのではないかと思われる。

また、同様のアプローチで本研究と対象を同じくする研究として

Catherine Lee Carter『The Role of Theology in the Production of Space in Shaker Societies』(Ph.D. Dissertation: University of Maryland, 2005)

が挙げられる。プレザント・ヒルの建築活動を対象にして、その中からシェーカー教理論の影響を見出そうとした研究である。この研究では理論の部分をHaydenより詳しく扱い、シェーカー教の創設をまず描き、理論の形成過程を扱っている。しかし、プレザント・ヒルの建築に関しては完成形を並列で扱い、その建設過程や背景が扱われてはいない。

どちらの研究もその分析の核とされているのはシェーカーの「ポスト・ミレニアリズム」の思想であり、理論の形成過程を扱った後者の研究においても建築活動の分析の箇所では「シェーカー・ヴィレッジ＝地上の樂園」という式が多用される。また、どちらの研究にも共通して教義や理論の発展の末の結果として建築活動が扱われている。

本研究は手法としてはシェーカー教の建築デザインを教義との関係から描いた第二のアプローチの研究に基づくものであるが、さらに建設の過程、そして完成したあと、を扱っていくことで教義と実践の相互関係を明らかにしたいと考える。

〈本論〉

第1章 シェーカー教成立の背景

本章では創立期の指導者アン・リーの経歴や功績を明らかにすることで、シェーカー教成立の背景を確認した。本章の目的はシェーカー教を完成させていった人々がこの宗教をもって何を達成しようとしたのか、シェーカー教の完成形にいたるまでの経緯の一端を明らかにすることであった。

シェーカー教の伝記作家によって書かれた二冊の本における記述を中心に、その作家の意図を読み取りながらどのように創設期が描かれたかを確認した。

信仰面での不満を抱えた子ども時代、そして生来の「異性間の肉体的な同衾」に対する嫌悪、子どもの死と結婚生活からはじまった人類の救済への模索、とアン・リーがマザー・アンになるまでのストーリーを確認した。また、とくにアメリカ入植後の活動を見ていくことでアン・リーの生前、地上の実践を規定する構造は存在しなかったことがわかった。改宗した信者たちは家へ帰り、「Hands to work, hearts to God(手は仕事に、心は神に)」捧げるよう教えられた。このアン・リーの言葉は後年、シェーカー教の工作物を評価する際によく用いられる創始者の教えであるが、当時多くの信者にとって意味したのは文字通り信仰心を持ちつつも自分の仕事に専念して生きなさい、ということであった。

アン・リーによって1774年にアメリカにもたらされた「シェイキング・キューカー^[2]」の信仰と、一般的に語られる「シェーカー教」の信仰の間には、改宗後の生き方という面で大きな違いがあることがわかった。

次章では一般的に語られる「シェーカー教」がどう完成されていったのか述べていく。

第2章 シェーカー教共同体の統治構造

第2章ではアン・リー以降の指導者、ジェームズ・ウィタカー、ジョセフ・ミーチャム、ルーシー・ライトの経歴と功績を確認したうえで、シェーカー教の組織構造の完成までの経緯を整理した。

まず指導者の経歴からはジェームズ・ウィタカーが創設期を知る最後の指導者として、アン・リーの絶対的カリスマからジョセフ・ミーチャムらによる宗教全体の構造化の橋渡しとして、基礎を築いたことを示した。そして、シェーカー教の組織構造の完成までの経緯としては大きく分けて

- ①共同生活のはじまり(1787)
- ②社会経済的単位である「ファミリー」制の確立(1791)
- ③共同体全体の統治構造の確立(1793)
- ④信者拡大のためのシステムの確立(1800)と4つの契機があることを示した。

また、シェーカー教の建築活動を語る際に引き合いに出される「地上の樂園」、「千年王国」という教義はジョセフ・ミーチャムによる理論書の出版によって確立されたことを確認した。

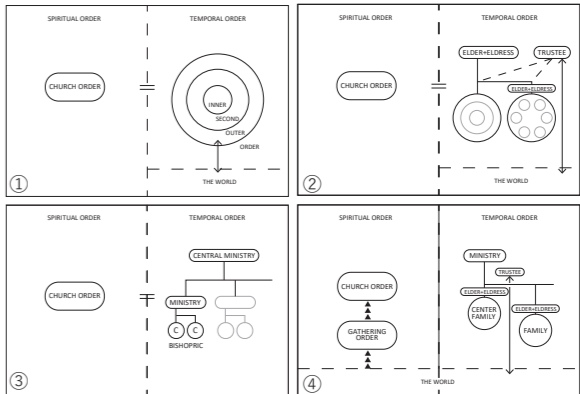


図1 統治構造の変遷

第3章 プレザント・ヒルにおける実践①

〈19世紀前半建築活動〉

第3章ではシェーカー教コミュニティのひとつであるプレザント・ヒルにおける活動として、まず19世紀前半の建築活動を対象に分析を行った。

■コミュニティのはじまり

プレザント・ヒルは、1805年に開始されたシェーカー教の西への宣教活動の結果として創設された「西部コミュニティ」のひとつである。1806年に初期の改宗者の間で誓約書が結ばれ、シェーカー教コミュニティとして設立された。

■建築活動の評価

まずプレザント・ヒルにおける記録史料に残された建物に関する記録を分析し、1845年までに建てられた建造物の中で、どのような建物がプレザント・ヒルのシェーカーにとって壁と屋根以上の意味を持っていたのか明らかにした。

1809～1845の間にプレザント・ヒル・ヴィレッジにおいて建てられた建物は全55軒であった。そのうち22軒が19世紀前半までのプレザント・ヒルのあらゆる記録がまとめられた資料「The Origin and Progress of the Society at Pleasant Hill (プレザント・ヒルにおける共同体の起源と進歩)^[1]」において「Church Improvement(教会の改良)」として言及されていることが分かった。

22軒の建物の種類を以下に挙げる。

- ミーティング・ハウス
- ドウェリング・ハウス
- ミニストリーやトラスティの仕事場兼住居
- ウォッシュ・ハウス
- コミュニティ内のインフラ
- 納屋
- 種産業に関わる施設^[4]
- ほか煉瓦造の建物

■配置の変遷

次にこれら「教会の改良」として言及された建物を主な対象とし配置の変遷とともに建築活動の経緯を明らかにした。

1809年から1845年に行われたプレザント・ヒルにおける建築活動は以下三期に分けることができることがわかった。

①コミュニティ配置における構造・秩序の発見(1809～1815)

1812年のミーティング・ハウスとセンター・ファミリーのドウェリング・ハウスの完成をもって、ふたつの向かい合った軸を中心軸とする以降のコミュニティ構造のデザインの基本が発見された。また、西部コミュニティにおけるドウェリング・ハウスの雛形となったT字平面が発明された経緯を示した。

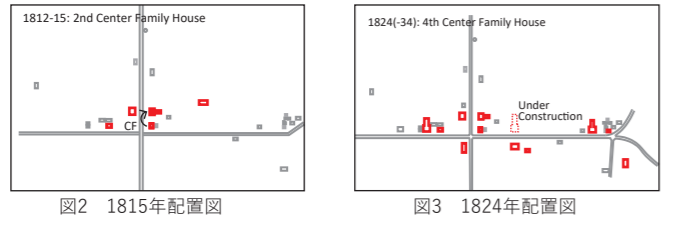


図2 1815年配置図

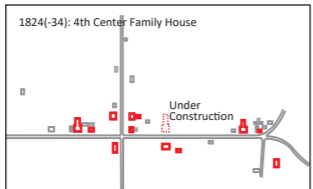


図3 1824年配置図

②構造・秩序の構築(1817～1824)

同じオーダー(信仰上のレベルを示す単位)に属するが、序列の低いファミリーが初めて「教会の改良」として言及される(イースト・ファミリー)。コミュニティの社会的単位であるファミリーが地上における構造を決定する大きな要素となり、信者の信仰面での立場に関わるオーダーの考え方より大きくなったと考えられる。また1824年のセンター・ファミリー・ドウェリング・ハウスの建設開始をもって、三つのファミリーのドウェリング・ハウスをミーティング・ハウスを軸として対象に配置する構造が完成に近づいた。

③地上の構造が信仰上の構造を上回っていく(1825～1845)

1824年に建て始められたセンター・ファミリー・ドウェリング・ハウスが完成したのは10年後の1834年であった。そのころには信者の

住居は余剰し、非信者の宿泊場所が不足している、という状況になっていた。センター・ファミリーの完成によって、1817年から構想されてきた地上の秩序は17年ごしに完成されたが、結局イースト・ファミリーのドウェリング・ハウスは非信者のための建物となることとなった。、地上の秩序が重要視され、信仰面でのオーダーが伴っていないという状況であった。

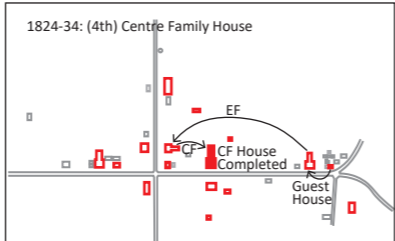


図4 1834年配置図

第4章 プレザント・ヒルにおける実践②

〈19世紀後半言説〉

第4章では19世紀後半のプレザント・ヒルのコミュニティ・メンバーによる言説を対象に、シェーカー教の実践のなかで生じた教義・理論上での変化を明らかにした。1871～1899年に出版されたシェーカー教の宣教誌『The Manifesto』^[5]対象とし、プレザント・ヒルで暮らしたシェーカー教徒による言説とその変遷を分析した。

プレザント・ヒルの住民によって寄稿された記事は29年間の間で67編存在することがプレザント・ヒル研究者Aaron Genton氏によって明らかにされているため、本研究では当氏の編纂した67の記事を含む資料を分析対象とした^[6]。

■記事数の傾向

年代別の記事数としては1870年代が43編、1880年代が17編、1890年代が7編とおおきく1870年代に偏っている。また1870年代の中でも前半の1871～1875年6月の期間に26編、後半の1875年7月～1879年の期間に17編と初期に偏っていた。

■著者の傾向

29年の間に『The Manifesto』に寄稿したプレザント・ヒルの住人は計18人であった。その中の二人を除いてはプレザント・ヒルのミニストリーによってつけられていた日記から関連した記述が見つかった。

日記から記述の見つかった16人のうち、一度でも長老の地位にあったことのある者が9名、そのうち6名がセンター・ファミリーの長老であり、センター・ファミリーの長老になっていない3名はギャザリング・オーダーの長老であった。長老として記録に残されていない著者に関しては4人がコミュニティ内で教師としての役割を果たし、1人が俗世とのビジネスに関わっていたことがわかった。

■内容の分析

次に全67編のうち詩を除いた55編の内容を分析した。想定されている読者によって分類を行うと下記の3者に分類することができた。またそれぞれの内容についても分類を行った。

分類	想定されている読者	記事数
1	非シェーカー教徒	13
2	編集部／指導層	11
	2-1 シェーカー賛美	(7)
	2-2 質問	(2)
	2-3 報告	(2)
3	他のシェーカー教徒	31
	3-1 より良いシェーカー教徒へ	(16)
	3-2 苦言	(3)
	3-3 シェーカーであること	(10)
	3-4 その他	(2)
		計 55

図5 想定されている読者による分類

以下4つの年代別に特徴を見て取ることができた。

①1871(2編)

創刊年の1871年は具体的かつ物質的な繁栄を示唆するような希

望をもって『The Shaker』に代表される新しいシェーカー教の時代を見ていることが特徴である。この物質的な繁栄への希望は、特に最初期の1871年に見ることのできる特徴である。

②1872～1875(24編)

ほぼ半分の11編が「分類3-1:より良いシェーカー教徒」へなるには、という内容の記事であった。また6編が「分類1:宣教を意図した記事」となっている。この時期の宣教記事からは、「シェーカー=正しい道」であることを語ることで非シェーカー教徒の興味を引こうとする傾向が読み取れる。

③1876～1879(10編)

一番多いのが「分類1:宣教を意図した記事」で全体の半分を占めている。この時期の記事からは幸せを売りにして宣教する反面、それゆえ生まれる昔からの信者の葛藤を読み取ることができる。またプレザント・ヒル経営の困難が前節よりも顕著に紙面にあらわれるようになる時期でもある。

④1880～1889(14編)

この時期の記事の特徴は三つあり、①昔を懐古し「シェーカーでよかった」という結論に至る記事と、②比喩を用いてシェーカーを手放しで肯定する記事、そして③困難な状況への忍耐を説く記事である。1870前半によく登場したシェーカー賛美や希望的観測は少なくなり、またどうすればより良い信者になれるのかという模索もなくなっていく。

⑤1890～1899(5編)

この時期の記事からはコミュニティの「衰退」と終わりを見据え、信者の持った意識として、「身体からの解放という諦念」と、アメリカ合衆国のモットーを取りあげて「ユナイテッド・ビリーバーズからユナイテッド・ピープルへの移行」を説く、という二つの傾向があることがわかった。

第5章 考察:シェーカー教のミレニアリズム

■プレザント・ヒルの「衰退」に対する態度

まず、第3章・第4章の結果とプレザント・ヒルの「衰退」に対する態度を照らし合わせることで実践が信仰に与えた影響を考察した。プレザント・ヒルではコミュニティの問題(おもに財政面)を解決するために俗世との分離を緩めていったが、その結果信仰面でも墮落を招く結果となったことが既往研究では描かれる。第4章で確認した終焉を見据えた態度はどちらも分離が緩んだからこそ生まれた態度であったことを考察した。

■シェーカー教理論における「アメリカ」

終焉を見据えたプレザント・ヒルにおいて見て取ることのできた「シェーカーとアメリカ」というテーマをシェーカー教全体で位置づけるを試みた。結果として、男女の分離を論理付けるために使われた「ふたつの世界(シェーカーとアメリカ)の平和的共存」という考え方が、共同体の「衰退」にあたって未来への視座として取りあげられていることが分かった^[7]。1900年周辺において「シェーカーとアメリカ」というテーマは、シェーカー共同体という「種の保存」、そしてシェーカー教徒という「個の保存」、両方のために取りあげられたことを指摘した。

■「分離と二面性」

最後にシェーカー教の地上にある事柄を規制する構造の変容として、「分離と二面性」という構造が共通して存在していることを指摘し、その均衡が崩れることによってシェーカー教は変容を遂げてきた様を考察した。

結論

本論文では建築活動と出版物による言論活動、二つの実践を並べてみることでシェーカー教の教義と実践の間にいくつかの相互関係があったさまを描くことができた。

まず、第1章ではシェーカー教の最初期、創設期の記録を読み解くことで、地上の実践を規定する構造のなかった時代を確認した。この時代、シェーカー教徒であることと信者の生活のかたちは無関係であった。

そして第2章では統治という実利的な目的を持った構造の確立に

よって、教義に大きな変化があったことを確認した。シェーカー教であることは生活のかたちとなった。

第3章では第2章で確認した組織構造をもとに、コミュニティにおける地上の構造が発見され、完成される経緯を確認した。そして、地上の構造が信仰の構造と分離され、地上が優先されていく様を確認できた。

第4章では建築活動の後に語られることの少ない19世紀後半の言論活動という実践を分析することで、時代と状況に合わせて信者の信仰に対する意識が変化していく様を確認することができた。また、既往研究では指摘されていない、コミュニティの「衰退」に対した時の信者の態度を指摘することができた。

第5章では第3、4章で確認したプレザント・ヒルでの実践を、共同体全体で位置づけるを試みた。その結果、「二面性と分離」という構造の中で「シェーカー/アメリカ」というテーマが、構築、再発見されたことを考察することができた。

注釈・図版出典

【1】「キリストの再臨と地上における神の王国の樹立によって、この世の姿が変えられることとなる。この状態が千年続き、その後最後の審判が来る」という考え方。「後千年王国主義」とは再臨が千年王国の後に続くと考え、人間の努力が再臨に影響するという考え方。【2】シェーキング・クェーカー (Shaking Quaker) イングランド時代はこう呼ばれることがあった。【3】Harrodsburg Historical Society (Harrodsburg, Ky.)蔵【4】種産業はプレザント・ヒルの主要な産業のひとつであった。【5】『The Manifesto』がいちばんよく知られた名称であるが『The Shaker』『Shaker and Shakeress』『The Shaker Manifesto』と全部で4の名称で呼ばれていた。【6】Shaker Village of Pleasant Hill, Library所蔵【7】White, Anna and Taylor, Leila S.『Shakerism : its meaning and message』(Columbus : Press of F.J. Heer, 1905)

図1～5 筆者作成